

市民力かわら版



障がい児の福祉の拠点として 環境に恵まれた旧長井小、活用の可能性は無限大！

平成二十一年三月に廃校となった旧長井小学校。

地元の人々の愛着の強かった高原山の麓にある木造校舎はまだまだきれいで、その有効利用は市民にとっても関心の的だった。

四月から、この校舎の管理をNPO法人ワーカースコープ矢板地域福祉事業所が行うことになり（校庭と体育館は別）、七月末には、二つの教室を利用して、新たに児童デイサービス「りんごの木」が始まった。

今後の利用方法などを所長の櫻井きの未さんに伺った。

●地域が必要とする仕事を創出するNPO法人ワーカースコープ

聞き慣れない言葉だが、ワーカースコープは、利益を追求するのではなく、地域が必要とする仕事を創出していくために、働きたいと願う人が自ら仕事を作っていくNPO法人だ。この旧長井小学校を活

用し、地域の絆再生のよりどころとなるよう、児童デイサービスⅡ型（障がいを持つ学童期の子どもが対象の放課後の居場所）の他、障がい者（児）支援員を養成する職業訓練事業（九月から）、農業・食にかかわる事業、居場所作り、多世代交流などの事業を展開する予定だという。



りんごの木開所式の様子（7月）

●安全な環境でのサービスを

現在、登録されている児童は三名。年度途中での開所のため、今年は準備期間と考えている。今まで矢板になかった施設であり、体験できるな

ら徐々に利用したいという希望者はまだいる。そこで、来春以降はもう少し利用者を確保したいと考えている。

障害者自立支援法の事業ということで、利用するために市・福祉高齢課に相談して受給者証が必要。利用者は一割負担。三ヶ月の平均利用者数に上限の規定があり、そのため定員十名となっている。

三年ほど前から、親が迎えに来やすい市中心部に場所を探していたが、安全に子どもが過ごせる良い物件がなかなか見つからなかった。ここ旧長井小は、場所としては広すぎるくらいだが、環境と安全面では十分だという。

また、障がい児の通う特別支援学校は十八歳で卒業を迎える。親にとってはその先が心配の種。そこで、九月から開始を予定している支援員を養成する職業訓練は障がい児の自立に向けて大きな意味を持つと考えている。



まだまだきれいな校舎内

十月二十三日にはふるさと創年大学がここで秋祭りをやることになっていくが、その他にも、この場所を使って、子どもたちも一緒に参加できるようなことができないかと模索している。

●地域に根ざした施設に

「大切な、歴史のある学校を活性化の拠点にするために市民の皆さんにどんどん入ってきて欲しいし、一緒に活用を考えていきたいと思っています。また、学校の花壇や樹木などの維持も大変なのでご協力をいただけると大変ありがたいです」と語る櫻井所長は、中学の時に、りんごの産地として有名なここ長井に転入してきた。

知り合いも多く、農業関係を大切にして交流が図れないかと考えている。

障がい児の就農支援にもつながる可能性もあり、何よりも子どもたちにとって高年齢層を含め多世代との交流は社会性を育てる上で大事なことでと考えているからだ。